

呂一子論 完

福澤 諭吉 立案  
中上川彦次郎 筆記



明治十八年十二月出版

### 品行論緒言

日本男子の品行に就て、我社會のた先又外國交際のためと謀りて不満足なるもの甚ざ少ふからき我輩同志者と共に常に憂慮せる所ありと雖ども抑も今の世界文明の程度に於て此一件に就き人の本心の非を正さんとするが如きは企て及ふべきにあらざれば唯不品行の醜と醜と玄て之を秘密にせんあと第二の冀望あるども是れさへ注意する者なくして漫然とする者多きと實ニ慨歎に堪へず東洋西洋男子の品行と尋ねて其内實の正味と吟味したらば或は難兄難弟の事實を發明することもあらん彼の道徳は士の常に憂る所あれども事都て秘密ニして尙ほ恕を可きものあり然るゝ獨り我日本國に於て、數百年來の習慣その内實を外に現いし恬と玄て平氣なるが如きは益赤面の次第あり思ふに世上我輩と同感は士も必ず多からんと雖ども元と此事さ

るや之と言ふ又愉快あらず心竊々感慨を催ふしながらも先づ發言を見合せたる事あらん我輩とても同様にして生涯無言又附して穩便ならんこところ願へども左りとては又際限あるべからず殊に近來の世界交通の道至便至迅として何時<sup>いつ</sup>しり我内情が外人の耳目に觸きて如何ある攻撃を蒙るやも圖るべからざれを未だ其論鋒又當らざるに先だち我より自<sup>う</sup>か<sup>う</sup>注意して日本人中亦品行の得失を論したる者ありて男子社會の面目漸く改まりたりと云へば自から以て他の侮<sup>そ</sup>禦<sup>よ</sup>くの一助ともなるべしと思ひ數日の筆を勞して勿々一編を綴りこれと本年十一月二十日より十二月一日までの時事新報ふ記載<sup>え</sup>て世人の注意を促したり蓋し今日の日本人の日本限りの日本人にあらぞ一言一行一舉一動全世界<sup>よ</sup>對して其責に任せざる可らず全國無數の男子能く其責に任して愧る所有るや無きや明治十八年十二月東京日本

品行論

福澤 諭吉 立案

中上川 彦次郎 筆記

國といひ人の集りたる一体の名なり故ニ國の貧富強弱とは其國民の貧富強弱として貧弱は人の集る處これと貧弱國と云ひ富強の人の集る處こそと富強國と云ふ貧弱富強人に由りて國の名を成すと云はば智愚徳不徳も亦同様にして智國あり愚國あり徳國あり不徳國あり何れも皆その國人の言論舉動如何に由りて國の輕重を爲せものなりむかし鎖國の時代ふ在ては國の貧富強弱智愚徳不徳も一國の内ふ限り人々内に相互に比較玄て品評を下したるまでに止まり其集まりて一國一体の輕重を成すに至ては其輕重を以て外に相對するものあきが故小輕重あるも輕重を知るに由あく獨り自うら評して自うら輕重した

ることなりしうども今や國を開て文明諸國の人と親しく交を接する  
のうちにい恰も我國の輕重と提出して世界普通の天秤に掛けたる姿な  
れば厘毛は差も分明として之を掩ふべからず殊に鎖國の舊物と披露  
しそ之を世界に大勢文明の光ふ照らし見きば我富強必ず玄も富強な  
らず我智德必ずしも智德ならずして時としては古來不智不德とした  
ることが却て智德の名を博するものなきにあらず左を一個人の重  
だを集めて一國の重きと成し世界の品評と附して愧るふとなかうん  
とモるには先づ我耳目の區域と廣くし文明世界の貧富強弱とは如何  
なるものぞ其智愚德不徳とは如何なるもれそと之を知り盡玄て自か  
ト銘々の覺悟もあるべし學者の當さに講すべき所のものとして其目  
甚ざ多ければ今そけ一小部として最も手近き人の品行の事に付て聊  
か所見と陳んとす之を題して品行論と名く

前ふ陳べたる如く國の輕重いろの國人の輕重に在て存すること誠よ  
明白なる道理にしき而して今人の世よ重んせらるゝは何事か原因す  
るものあるやと尋るに一身の外行内行を脩先一舉一動細々積で事實  
に現されたる成跡より外なふす之を喻へば時計の面に秒時と積で分  
時とあり、分時を重ねて時とあるが如し細行集まりて一身は重きと成  
その狀以て見るべし扱ろの外行とは洋語にパブリック・モラルナと云ひ  
専ら人間社會の交際ふ關する所にして例へば報國盡忠と云ひ政治の  
思想と云ひ民利國益の働くと云ふが如く一身一家を離れる其外の利  
害を心配せるものなり國のために死し、人のために勞苦し、公共れた先  
よ身を苦しめ世民の苦樂を喜憂するを云ふは即ち外行と脩るもの  
なり、次きに內行とは専ら一身の私よ係る行にして之をプライベート  
・モラルナと云ふ例へば夫婦親子の間柄、一身の起居眠食逸樂の事等全

く社會公共に縁あき私の働くして内に属するが故ニ之を内行と名くるものなり今本編の旨とする所ハ専らこの内行も就て言と立るものなるが故に古來今ふ至るまで日本國人ハ内行は如何ある有様にてありしや今日は如何なる有様なるや其内行の當局者もあらざるも他の内行を見て之を評論するに何と以て標準に定めたるや又今日は如何に之を定むるや之を吟味すること第一の要用にして之ふ由りて我人民即ち我國が世界ふ對するの輕重も自クら明あるものあるべし我日本の古代も世界各國野蠻の由來歴史に洩れず専ら武と勇ぶれ風にして心身優等の者は唯戰鬪を事として家も居るふとさへ稀あれば固より内行を顧るに遑あらず父不レ父子不レ子夫不レ夫婦不レ婦山川を跋涉玄て時に飢渴も苦しむことあれバ戰勝の興ふ乗して放食鯨飲啻に遠征の天ふ花柳の枝を折るのとあふず人は子女を強ひて春を促がし、

敵に妻と取て妾と爲モが如き甚だ乱暴なる始末は足利時代戰國の史類と見ても之と知るべし今日も於ても船頭、航海者、旅行商人、軍人等の如た其職業柄に由て家と家とすること能はざる者は内行を慎しむの念も自から薄くして時として酒色は慾と絶つの其代りも時として又大不之と柰にそることあり蓋し其生活常あらぞして危険と冒し、事の極度は死生さへ定め難き職業なるダ故ニ其苦痛の償として機に投そをば快樂と逞しモる者ふ玄て其趣は戰國の武士ふ彷彿たるものと云ふも可あり一概ふ其人と咎むべからず畢竟其人の職業に從て然る者なれば大に恕する所のものあかる可らざるなり且又戰國武士の乱暴右の如く實に亂暴ありと雖モ此武士に德心あきに非す、一諾山よりも重く、一身塵よりも輕し其義を重ん玄て死と輕んぞるの士氣之後世人の人を見て感服せしむるも甚多玄と雖ども如何せん其人の心事

唯武略戦鬪の一方に偏して内行の重き由縁を知らず、其重れを知らざれを之を犯すも自ら愧るふとなく公然平氣にて得たりし者の之を聞く豊臣秀吉が大坂城に西班牙の天主教師と召しこ其教旨を聽き一も怪しむことあくして之を悦びたれども唯天主教中、一夫一妻の誠は吾れ之を守ること能はむとて公然憚る所もなく不服と述べたりと云ふも豊公の心事の淡泊磊落にしき都て當時の武將が内行の重きを知らず之と物けりずともせずして平氣なりし一證と見て見るべし戦國の世に内行と輕んするの氣風は時勢に止むを得ざるものなれば之と怪しむ足らざるなり然ば則ち古今我國民全般の風俗と察して其内行如何を視るときハむり玄の武士の遺風に依るものと判断玄て可あらん如何となれば日本は尙武の國と自稱するやせの國にして社會の權力は武人より歸し武人の言行は他に模範ともなりしことなれば善となく惡となく皆之に靡いて風俗を成したるものなればなり

足利の末世より織田豊臣を経て徳川に至り多年の騒乱も治まりて無事太平の天下と爲り整然たる封建世祿の制度と定めてより曩の武將武士は遠征戦鬪の事と止め其舉動の最も活潑なりし者が最も不自由なる身分とあり前年は櫛風沐雨終歲家に居るふとて之幾日と計へず、家郷ふ遠征を思ふ者あるも身は戰勝は敵地に秋月と咏えて杯を傾くるなど磊落至極ありし境界も今は變玄て封建の居城門閥の邸宅に住居をるふととなり衣冠正しく政堂ふ坐して常の事務を執り以前の穀伐易るに文飾を以て玄て公用に非ざきば外出さへ意の如くならず其趣は野獸と捕へて檻に入れたるもの如く窮窟も亦甚ざし即ち是れ徳川政府が封建の將士を御するの法として其旨は外面の禮式を以て武人の粗暴を制するに在り儒者の語と借用すれば禮と以て天下

と治るものあらん其政略の得失は兎も角も武人等は此禮式の生活に馴致せられて一代を終り二代を経て其外部丈けは頗る柔順にして文雅なる者には變性したきとも父祖以來に傳へ遺しる活潑磊落の氣質は之と脱モベカラズ此氣質を養ふよ門閥の富を以てして錢の不易からざれば活潑磊落は變じて勝手我儘と爲り之と禁ずること甚ざ易からざれど戸外の交際は禮儀のために都て窮窟ふして樂しらざれば内の我儘を以て無上に愉快と爲玄のく一小天地に閉居して肉体は快樂と恣にするは大小の差ふをあれ上に將軍家より下は大名旗本諸藩中の大臣に至るまで封建門閥家に普通に玄て其樂事は一二を舉きば庭園泉水を作り珍禽奇花を買ひ能樂茶の湯歌舞管絃邸内に乘馬、邸内の鷹狩等都て之と内にして外に出ることあく就中女色の如きは最も大切ある箇條にして千金姿色を買ふて愛しむ所な玄一貴族にし

て數十名の妾と畜ひ隨く又數十代子と生み或は同月同日同時よ一腹双子なうで二腹二兒と産して其兄弟姉妹と分つに苦しむが如き奇觀なきよ非ず徳川將軍家齊公は男女五十一人を生ミ家慶公ハ廿七人生み其他諸藩主にても三四十の子を擧る者は誠に珍らしからず其内行の紊亂推して知るべし其家を一見して仮令へ父兄たり子孫たりの教の明あるも夫夫たり婦婦たりの條理は不分明ありと云はざると得ず畢竟するにむかし心身の自由活潑にして内行の何もれたると知らず豪氣無頓着を以て平氣ありし武人の一族が太平の後に至りてもその舊習遺傳と脱モ能はず外部と上品に文飾すれども内行と輕んするの實い戰國の時代又稍や相似たるものと云ふべし右の次第をば封建門閥の武家は内行は何ものたるを辨へずして都て粗暴無狀なりしやと云ふよ決して然らず徳川の治世元和偃武の頃

より儒者の教漸く明に玄て殊ふ全國の武家は大抵皆この儒教に養育せられて仁義禮智の道、孝悌忠信の教、之と遵奉せざるはなし父母も孝にして長上に事へよど云ふが如れば朝夕儒門の教育ふして人生の外行内行の區別あく身と正うして物に接し都て誠意誠心ある可きを以て根本に立るが故に或は内行の方に却く重きを加へて専ら獨り慎むの一義を唱へたるが如きハ全く太平治世の然らしむる所として其文物の整然たるハ戰國れむりしに異なりと雖ども爰ふ不幸あるば彼の儒教あるもけゝ性質を尋るゝ専ら子弟小弱の者の心得と記したるものにして長上強大を警しむるは甚だ粗なり、子に孝行を教へて父母の義務と説かず、少者に枝を折るの勞と命して長者にその返報を求らず、少年子弟は常に叱咤せられて長老父兄と嘗て咎めしるゝよとなきは大主義又して其主義の達して男女の關係に現ひれたる所と見るも

亦同玄男子ハ强大にして女子は弱小なるが故に督責の鋒は常に女子の方に向ひ之に柔順を教へ之に謹慎と命し交際と禁し、多言と禁玄、甚ざしきは其無學不才ふして心事の卑屈なるを悦び之を目玄で女の淑徳など、稱贊玄て遂にその大切な教育の方便とも奪ひ去るにまで立至り却て男子の社會を視れば自由安樂、女子も對して毛頭の義務を負はず、強ひてその義務の在る所と求めば女子の生命と保存して之に衣食を給しるまでふ止まり、之を愛しるや玩弄の品として愛するのみ、之を親しむや身の邊に近きが故に親しむのとにして其交際上嘗て一點の敬意を見せて以て社會一般に男尊女卑は風俗を成したるが故に貴族門閥の輩が男女の關係又付き何やどに其慾を恣にして何やどに乱暴無狀なるも一般に世教風俗又於て之と男子の不徳として咎る者なし、たましく咎る者あるも人類と人類との關係と根本として論するふ

は非すして唯黒物の用法如何ふ就ての評論を下さすのみ、某氏は一旦の怒に乘して内室と放逐したりと云ふ妙齡の美婦惜哉むべし他日必後悔するならん、何君の馬を賣て妾に易へたりと云ふ駄と妾と孰れか快樂多かるんと云ふが如に其語氣を窺ふても女子と輕蔑し之を同等の人類として視ざるの情は明に知るべし左れも徳川の時代封建の治世も社會の文物は漸く明にして人の内行の教も漸く嚴重なるに似たれども内行中の最も大切ある男女の關係ふ於ては毫もゐの教の勵を見ず堂々たる貴族士君子として不品行を犯して自から愧ると知らぞ人も亦咎めざるは之を基督教主義の罪と云はざると得ず、儒書萬卷その教ふる所到らざるゝなしと雖ども一夫一婦男女同數同權的道理に至りくい嘗て一言の之ふ論及したるを聞かず却つて男尊女卑の談は常に喧しくして既も尊卑を分つときは尊者が卑者を器として之を玩弄するの當然の事ふしき男子の品行脩るんと欲するも得べうらず故に我輩の所見に於て今け日本男子は品行を正さんとするよは戰國武士の遺臭なる磊落無頓着の氣風と制して兼て基督教主義の缺典を明にするに非ざれば叶はざる事と信ずる者なり

我日本男子の品行を正さんとするふは戰國武士の遺臭ある磊落無頓着の氣風と制を兼て又基督教主義の缺典を明ふするふと緊要なりとは前節に之を發言したる所にして我輩の所見と以てすれば今の男子の品行に就ては聊か不平ふきを得ず其紊亂と撥して正に反らし免んと欲するに至極の願なれども凡ろ事を論すると易くして之を實地に行ひれしむるに至る甚く難し即ち世の中の常にして其行はれざると知りあがら酷に論じて直に人ふ迫るは趁跋（ちんば）に迫りて走るを促がそに異ならず啻々無益あるのみあらぞ其促がさるゝがため又却て落膽して尋常

の歩行とも思止る者なきを期す可らず即ち趁跛をして自暴自棄の境界に陥らしむるもれあれば我輩の取らざる所なり左をば方今、日本男子の品行如何を吟味したらば先づ以て趁跛の方多數あるべ亥と云はざると得ず故ふ我輩は此流の人に向て直に反正を求る者にあらず既往の事ハ暫くあれと恕しく今後の所望と申せむ後進生が先進故老は不品行ふ做はざる事と又仮令へ自クら制するみと能はむして不品行を犯もしも之と人生内行の最も大切な事柄として極めて秘密にして醜聲を放たざる事と又從來世は中は醜と心付かざる所に注意亥て之と遠ざくる事と以上三箇條なりこの箇條の中より不品行と犯すも之と秘密として隠そべしとは所謂因循姑息の談にして正義論者の意に適せむ本來人の不品行と正さんとあらば根本より之と正すべし道二つ正と不正との三苟も萬物の靈として人倫の範圍中に在る者ならば斷

じて醜行を許す可らず内外表裏一切これと容るゝの理なしとて正々堂々の議論を張る者もあらん我輩とても固より同主義ふして其論鋒に對してハ一言の非と呈するもと能はずと雖ども抑も闇闢以來今ふ至るまゝ人情自然の慟と教育人爲の力とと視察するふ此人類として完全無缺の品行と保たしめんとする之極めて難きふにして心身遲鈍虛弱あるがために不品行と犯すもと能はず又はきと犯すに要なき者う然らざれば心身活潑強壯よ亥て之と犯すの法を知りながらも之と敢へてせざるの勇氣ある者を除くの外は今日如何なる議論と以く之と責るも彼の趁跛又疾行を命すると一般誠ふ無益の催促あるべし然り而亥て滔々たる天下にハ心身の極めて弱死者も少しく又非常又豪勇ある者も稀にして云はゞ趁跛千人又千人の世の中より古來その趁跛の不具ある所以を明にして之を諷しむるの教さへなた次第なれば

我輩も最初より此趁跛に向て多を求先ず先づ以て人間社會の外面体裁のため、不品行の痕跡を隠して表と裝ふ、ことを第一段として第二段は其これと隠すの虚策より遂に或は實を生みて實と品行の正に反るふともあらんかと漫々空想と設けて數十百年の後に好結果と待つのを今日の人間に有様にて色慾は其生活中に大慾にして之と制せるあと甚だ易ららず其急あると當りては財産と擲ち甚だしきと生命とも顧みざる程にものにして其事たるや私中の私人に語るべからず人よ問ふ可らず無限の苦樂と一身に感みて之を表面と現さず、身中身外千百れ状況と従ひ其苦樂と千百様と輕重するの事實あるふも拘はらず其事實は他人の得て知る可きもれに非れば傍より之と評論するよは大に恕する所のものなかる可らず故に我輩の目的は直に其人の私に就き個々に論みて個々に正さんとするべからず況して冷淡無味ある

る君子の教と標準にして人の私と摘發せんとは最も惡む所にして唯一片の所望は社會の体裁のたれ、人間の禮儀のために人々自ら注意して秘密の淵と深くそるの一點に在るのを文明開化次第に進歩すべきは人生の內行も次第ふ脩まりて正潔清淨なる君子社會を出現し、夫一婦配偶の分と守りて素るゝなきの美と見るべしと時として人の言ふ聞く所なれども今の事物の進歩と目して之を文明開化と名くることあれば我輩も到底此清淨社會に逢ふの目的なき者ありと云はざると得を試に日本と西洋と比較すれば西洋諸國は文明を我れよりも幾段と進みたるものなきども人の品行上に就き其私中は私と發し其秘密の淵に潜りて明察を下ざしたらば文明の人必ずしも其文明の割合に清淨ならざるの内實を發明することもあるべし唯其淵は水深くして之を窺ひ見ることの難きれみ左をば今の文明なるものは恰

も人間品行の性質と化學上に清淨にするの力はあくして唯醫學上より  
深く藏めて世の耳目を遮るの慟を呈するのみ即ち事柄の性質を變ず  
るには非ずして其性質のまゝに之を掩ふて臭氣を放さざるのを甚だ  
頗母しからぬ次第にして或は憤る者もあらんれども然りと雖ども  
今の全世界の西洋の文明開化を以て支配せらきて苟も此流より外る、  
者の人も人と齒もると得ず、國も國と伍と爲すを得ずを諦され俗に所謂多  
勢に無勢よろて之よ勝つ可きよもあらざれば都て其流に従ふて其風  
に倣はざるを得ず故ふ品行の一條ふ付ても歐米諸國人が眞よ其奉す  
る所は教義又徳ひ一夫一婦の旨を守りて清淨ならば其風よ倣ふ可き  
は無論なれども或い然らすして彼等の多數は内行に瑕瑾あらざるハ  
あし唯その瑕瑾を秘して深く隠すふ巧あるけみと聞ても尙ほ其あれ  
を隠モレ風よ倣ふこそ智者の事なれ、如何となれば吾々日本人も亦

今の文明開化の中に居り其開明の色に化して以て自國の体面を維持  
せんと欲する者あればなり况んや之と隠すと隠さざると其醜美天淵  
の相違あるに於てとや隠さざる可らざるなり尋常一様に事なれば過  
て改むるに憚る勿れとて身に過失あらむ之と人よ隠さずして明白に  
披露そると以て徳行の一斑と爲すことなれども品行の一條と少しく  
之と趣と異にし仮令へ之を改むるにも又改むること能ひざるふも只  
管隠すの一義と忘る可らぞ人と禽獸との區別その間髪を容れざるの  
處に在て存す、蓋し我輩ダ止むと得ず秘密の窮策に出たるものこれがた  
めに正義論者乞ふ之と諒察せよ

百千年に由來したる習慣の容易に脱す可らず全國民よ浸染したる世  
教は俄に其非を悟る者少なし我日本の開國に次て王政維新の古來未  
曾有の大運動よろて審ふ政治と改めざるのをあらず政治に縁あた民

俗教育殖産の事より衣食住の些末に至るまでも舊きを棄て、新ら玄  
きよ就た恰も新日本國を創造したるものゝ如くにして他國の人人が之  
を見て驚くはみあらず自國人も如何して斯の如くありしやと自かふ  
怪しむほどの今日に至り復た舊物を見る可きものなきに似たれども  
眼と轉玄て道徳の境界入り人の内行如何の一黠と視察して殊々其  
男女の事に關せる男子の品行と吟味すれば何ぞ料らん今日は尙ほ是  
れ開國以前の日本にして更に昔年の顔色と改めざるの實と發見した  
り然うのみならずむうしの封建門閥に伴ふに何か窮窟ある禮儀と以  
てして上流の武家又は民間の大家も不品行の醜あるも其醜は内に封  
鎖せらきて聲と放つこと得ざるの事情もありしかども今や門閥と廢  
すると同時又其窮窟なる禮儀の束縛も亦共々廢して品行の自由自在  
あると轡なき馬と春の野と放ちたるものゝ異ならず花と勇み、柳に戯

き、嫩葉の軟らかあるものに逢へ必口と接し、枯草の厭ふべきものあれ  
ば之を蹶散らし其活潑磊落にて無頓着なること青天白日十目の視  
る所ふしき一舉一動世間分明ならざるはなし而しき其馬の如何なる  
馬々と尋るゝ數百年前の戰國より由來して徳川治世の間も品行の事  
ふと嘗て頓着することなく其邊の教誡さへ受けたるふとあき者の末  
流にして今日の文明ふ會しても祖先遺傳の餘臭と脱するふと能はず  
口に文明の食と食ひ、身に文明の服を服し、言行一切文明を以て根本と  
成すゝ似よりと雖とも獨り品行の一件に至りて舊日本の舊態を保存  
する其有様は外國に久しく寄留して外國の語と學び日本語は殆ど忘  
れたるが如記語學者が其寢言ふは則ち日本語を語る者ゝ異ならず百  
千年来に遺傳して記憶に染み込ミたる言語は之を忘るゝが如くなる  
も夢中ゝは自から制ること能はずして自發るものあふん左をば

今の日本の文明男子が獨り品行の一件に至りて舊態と存するも此一件にはみ夢中にしそく今日尙や未た磊落無頓着と眠と醒ますこと能いざる者と判断せざると得ざるなり試に今の大人士君子と稱しそ世に景慕せらるゝ人物の或る部分に行はるゝ婚姻法と見よ父母と告げて娶るは愚あり、曾て父母より授けらる細君に伴ふは無理なりとて身躬から奔走して嬪娟の春色と探る者あり、又自家の晩春に綠葉陰と成亥子の枝不満たるを厭ふて之と棄る者あり、如何とも男子の獨立の男子あり、己れの生涯の配偶と擇ぶふ父母に問ふ的道理はあらうべし我輩ふれと咎めずと雖ども妻を娶るの獨立は生計の獨立と伴はざる可らず衣食は都て父母の資力に仰で妻ばかりは則ち自力を以て擇ぶの奇談ふきにほらぞ又昔年曾て實父母養父母の命ふ由て定めらきる糟糠は妻を顧るの道理となつるべしと雖せも之と顧みざると共

ふ昔年曾てろの養父母が己れを養ふて衣食と與へ教育の世話まで力を盡したる無形は深切、有形の費用とも共に忘却して之を顧みざるが如きは自利主義の調子外れと云ひざるを得ぞ

又維新の一擧門閥と廢して四民同權の世の中となり大名も公卿も武士も農工商も平等一切縁組勝手次第として大人達が素町人土百姓の娘を娶るゝ甚だ妙なり我輩の最も賛成する所、文明開化は斯くまそある可けれど明言すと雖ども其町人百姓の娘に種類あり醜美才不才は姑くあれと論せむして婚姻の相娘に先づに金の相談と以てそる如何なる種類のものなるや其金も男女双方が相互に家の貧富を測量そるゝあらすして婦人の方は固より貧と定まり、所有とての身体の外に物あくして云はゞ此身体の價を評して金の高と定め以て縁談と調ふるふとなり、其金の名義は必ずしも代價と云はず或そ支度金或は

手當金或は御拜借金等さまゝに飾の言葉へ移れども詰り金あれば  
縁談調ひ、金あけれを調はずとの事實あれば金と以て婚姻と賣買せる  
ものと云はざると得ず况んや唯婚姻に臨て始先て金の談み及びたる  
に非す其婦人は平生既に己に表向き又内證に賣嬌と事とする者に  
於てをや明に之と身受けと云ふて可なり故ゆこの種類の婦人と婚を  
する者の仮令へ婦人の出處が町家にても在家よりも又士族よりも一切  
こを不正の婚姻と云ひざると得ず如何となれを婚姻と賣買するハ  
文明の事非ざればあり大凡そ今の世間に妾と名くるものは大抵皆  
ひの婚姻法と以て得たる婦人にして内妾あり外妾あり又時としては  
妾より登級して正室の位に昇り所謂玉の輿に玄て得々たる者あり然  
り而玄て其妾なり又登級正室なり極めて之を秘密にして世間に隠し  
又或い既に正室に玄て隠すべからざる者なれば不都合あがら又殘念

あがら其交際を扣目にして勉めて人の耳目に觸きざるやうに心掛け  
以て社會一般は外面とさへ取繕へば最早や我輩の所望は達したるも  
のふして尙ほろの上ふも切込みて人の内部の私と摘發せんあとは我  
輩の爲ざる所なるのみあらず最も惡む所にして社會風教のために慎  
で之と黙し勉めて之と隠すの微意なれども如何せん當局の本人ハ却  
て平氣として無頓着に附し之と人生は一大秘密事とするの精神なき  
ものゝ如玄例へば士君子相對の談話中も言、第三の人の事に及び何某  
の妾が云々と云ふが如きは尋常一樣のふとにしき必ずしも其何某を  
誹謗し又賤しむるの趣意もあらず甚ざしきハ公然他人に語るに拙者  
の妾 (my Concubine) が如何様に致して妾宅の内に箇様くなどゝ憚る  
所もあく口外せる者あり尙ほ甚ざ玄きは内妾外妾は數の多きと誇り  
人に之と知れぐしと云はねばかりに態と妾宅などと披露せる其趣は

廐に客と案内して手飼の馬を示すに等しき者あり我輩ハ聊か文明國の事情と目撃し又人に聞き書に見たるふどもあり其内情と云へば云ふべきもの甚ざ少あからずと雖ども青天白日の表面よりて我國の如きは未だ曾て聞見せざる所のもれにして赤面に堪へ走畢竟我國人不文の罪と云ひざると得さるなり

日本男子の品行論に就き從前世人の醜体不品行と心付かざる所に注意して之と遠ざくべしとは我輩の所望の一箇條なるが今ろの事實と舉ぐれば和姦密通の如きは世人の普く醜とする所ふして特よ物新らしく誠恵むるふも及ひざるおとなれども爰に世上一般の人が等閑よ看過しく内實の醜に心付かざる者は彼の藝妓の一族なり王政維新前にも三都その他繁華地よりこの者あり恵と雖ども其業は専ら歌舞管絃と奏し盃盤の間に周旋して客の酒興と助るの用に供するまでに

して淫猥の沙汰ハ極めて稀に聞く所にして藝妓社會にも自かゝ一種取締の習慣と存し稀に藝妓にして淫する者あれば其社會に擯斥せらるゝか又は公けに擯けられざるも本人が私に愧るの風なりしが維新以來大ふその風俗を破りて例へば東京市中にも藝妓ハ巣窟と稱するもの凡そ二十餘箇所、妓の數一千人に下らずの内部の隠密より外にして酒樓茶店周旋れ事情に至るまでも特に我輩の探り得て知る所よりて唯特に之と明にそると好まざるがために筆の端に記さるのみのあとあれども凡そ今の藝妓の業は單に歌舞管絃の藝を以て酒と助るにあらず其多數は客の需に應じて情と賣ふざる者あしと云ふ或る衛生醫學士の言に目下新吉原を始めとして梅毒検査を行ふて之がためよ大に傳染害を防ぎ得たりと雖ども唯これを公けの賣淫區に行ふにあらず其多數は客の需に應じて情と賣ふざる者あしと云ふ

を逐ふて後門の狼と防かざるに等しと語りたるを聞いても其内情の實は窺ひ知るべし、需る者ありて應むる者を生ずる歟、應むる者を見て需る者と來さす歟、そは前後は兎も角も維新以來近年よりて世上一般に藝妓を召すの風は日にますく進歩して小集大集こゝに酒あれを妓あかる可らず、社會の上流に立て天下の事を喜憂し德望を以て身の重きを成すと稱せる其人が昨日何々閣の高會には藝妓何十名を聘して興と助け主客歡を盡して散玄又今宵の地方より來集の何々と何々樓に會するの用意として既々妓と命玄たり其盛なる知るべしあどゝ藝妓は恰も饗應獻立中のものにして然うも其重要な部分と占め苟も妓と缺いでは君子の宴を成さずと云ふも可なり流風に流るゝ人氣の常として其勢止む可らず諸商人の金談、諸會社の懇會、少年書生の會合、朋友親戚の附合に至るまでも都て此風と成玄、甚だしきり寺の坊

主が寺門の用談にも圓顱滿坐酒酣にして紅裙緋衣と乱れて爛漫たるの奇觀を呈するあり抑もゐの種類の日本男子が宴席又藝妓と要玄て缺く可らざるものとそるは必ずしも其席に情を買ふの目的のみに非ず例へば酒樓に登り又自宅に仕出しえ料理と命しても客席は取廻はしこ手慣れたる藝妓に非ざれば不都合少あらずして事情止むと得ざるの場合も無きに非ざれども然りと雖ども今その藝妓なる者の素性を尋ねば人間社會中果して如何なる種族ふ属して文明の標準より如何なる品評を下だす可きものなるや前に云へる如く其中の多數は錢を以て情を買ひんことを需めて其需に應むる者とあれば物體の名義は兎も角も之を賣る者は則ち其實に於て一種の賣淫婦人と云はざると得を洋語に之をプロスチナート(Prostitute)と云ふプロスチナートハ文明世界ふ最も多くして最も賤しんする所の者にして苟も社會

の士君子たる者と公けに之を近づけざるのみか仮に彼の文明國に於て貴婦人紳士の盛會中に誤て賣嬌婦の座に在るあらば衆客は皆朝衣朝冠して塗炭に坐せるの思ひを爲し憮然と玄て之と避るよと伯夷が悪色惡聲を惡むの情に等しきもとならん是等の事情に就ては固より古學流儀、品行無頓着の人と共ふ語る可らず又洒落通達と以て自うら氣取る浮世の才子に告るも無益なりと雖も苟も夙に西洋の文明と志して其士君子に接し又の國々往來しく其社會の組織を目撃したる人には萬々心得居るべき筈にして且我國には多年歐米に留學あどしたる人も多り又は彼の民情風俗視察のたれにて特に巡廻したる人物の多きにも拘はらず扱う人々が日本に歸りて暫時日本の風に吹かるれば容易に之に風化して洒落の通人とあり時に或は置酒高會あり云へば例の如く藝妓の歌舞管絃に柳下惠の本性を現はし猥語を

羞ぢず、醜戯を辭せず且飲み、且語り、且笑ひ、且叫び、甚たしきは且横たはり、且眠り、百の妓女が我側に袒褐裸裎するも平氣なるが如き者あるとは實ふ不審に堪へざる次第なり我輩竊ふ思ふに是等の人物は其曾く西洋諸國に行きたると行うざるとふ論あく必ず彼の國人中々知己朋友ありて折節は文通し互ふ双方の動靜を報ずるなほんなれば其文書中ふ去る何月何日は吾々同志者が世教民利國益のために兼て計畫したる何々社の發會にして朝野諸紳士の臨席せる者甚多く某君の祝詞、某先生の演説終りて盛宴と張り云々までの報道の差支へなからべしと雖も其以下の文に當日宴席の酒興を助るがためふ藝妓何名を召して絲竹歌舞の愉快に衆客皆醉倒の歡と盡して去りより云々と記し尙外國人の事なれば唯藝妓とのみ云ふも其何ものたると解し難きが故ふ念のために一言と書た加へ本來藝妓とは我國にて其職業と

問へば字義の通りの業を執る女子なれども近來は彼等は風俗大いに變じて一步を進先竊み客の需に應えゝ一時又定時に情を賣る者あり蓋し我國上流の士君子が公けゝ又私に人と會しく大小の宴を開くふは必ず藝妓とその座に周旋せし先客も妓も盃盤狼藉の間に打混りて無上の快樂を享るの風なり云々との説明を送るべきや否や我輩の推察する所にては仮令へ其外國人が如何か親友たりとも是れまでの説明を添へゝ報道することは無かるべし否な、當局者の本心に於て報道をするふと能いざるべしと信す如何となきば藝妓を宴席に弄ぶの一事、内國人同士なれば甚だ安氣なれども外國人より對してハ少しく愧る所のものあればなり左れば此一事之文明國の人ふ向て断じて口外すべからざるふとよして獨り内國より在ては毫も愧る所あきもの歟我輩その理由を知らず一身は榮譽面目は細々積で重たを成すものなり一國の

榮譽面目も亦然り何者に輕薄兒り敢て之を人生の細行なりと云ふ自身と知らざり又自國を知らざる者あり

藝妓社會と去りて娼妓の境界を見きば純然たる賣姫は營業に志て彼の遊廓と稱せるは即ち賣姫の巢窟なり尋常一樣の人間世界とは非ざるあり抑も娼妓の利害に就ては今更ふれを論する者も少なく所謂道德家の所望に任すきば無き方が宜しが云ふは勿論のまとなれども人間世界は道德けみの世界に非す人類の身も之と二様ふ分つときは、一方は人にして一方は禽獸に異なり乍近く喻を取れば人の衣服を着けたる所は人類にして其裸体たる所は禽獸なるが如し道德家は注文通りふ自身の人心を以て自身の獸心の慟と制伏し得れば誠に呂出度き仕合なれども世界古今の例を見ず左れば獸心の慟果して止むべからざる歎然らば則ちうの止むべからざるに從て之と許し是れよりも

更に大ある害を防ぐふる利益あるとて今日に至りて也如何なる偏窟論者も世の中ふ娼妓の種を除うんなど云ふ者は絶てあることあし殊に文明の進歩して貧富は差の甚ざしきを致す其割合に準玄て虚飾も亦甚ざしきを致し貧人は貧あるがために妻と養ふを得ず富人は虚飾の慾に忙はしくして婚するの暇と得ず世界到る處に無數の獨身者を生じて我輩の情慾を満足せしむるためには非とも娼妓の方便なきを得ず實を申せば社會貧富の差、斯れ如く甚だしからずして上流も下流も相應々勞働して相應に錢と儲け以て一家と保つ可き仕組ならを娼妓の要も大よ減して好き都合あるべしと雖ども實際に於て其然ると得ざるは社會全体の大勢に妨ひらるゝものと云はざるを得ず一人の効を以て日に二三十錢より四五十錢(是れは都會の話に玄て田舎は此半に及ばざるもの多し)の錢を取り一月中々休日もあり又天氣に

妨げらるゝもありて之を平均すれば毎月の所得十圓に上ると得ずして五六圓に居る者と多數とす僅に一身の衣食に足るにのみふしく酒さへ呑むを得ず妻を養はんあとは思ひも寄らぬ事ふして若しも無理に妻帶して不幸にして子を産むふともほれぞ一家唯餓死を待つの外なし又上流の人の虛飾も止むを得ざる世間の風潮もして殊に歐米諸國みてハ其弊最も甚ざしく美衣美食して外顔を裝ふにほらざれば世間の交際と許されず就中男女婚姻は生涯の一大事にして即時に錢を費すのみあらず婚姻の後と家の面目を改めて平生の暮尚に費用の崇むふと以前に幾倍するが故ふ容易々企つべき事柄ふあらず先づ以て自身と辛抱するの外手段あることなく又近來の如く教育の方法の上進するゝ就ては男女ともに大に精神を發達して俗ふ所謂氣位は至て高き處に止まれども拵錢の一段に至りてい紛れもなだ貧乏人にして此

貧乏人が婚姻と求れば其相手も亦貧乏人ならざる得ず曾て何れかの大學校卒業して文才技藝抜群ありと稱する學士學女にても其才藝と以て現る錢を得て豊ある者又わらぎとは婚姻の相手は裏店の娘か横町の職人たるに過ぎず我が教育の品格と以ていざなか彼の殺風景ある娘に細君の地位を授ると得ず、彼は荒々しき下郎と良人と玄く親しむに忍びず我が身に錢ふそ無けれども人品は別ち君臣の差も窪ならずさて其狀恰も錢もなく智恵もあり貴族が爵位と勳章と抱て人の之を顧みるものあきが如し是亦獨身を守るの外よ詮方あき者なり故ふ文明開化の次第より進歩するふ從て人心漸く肉体の慾と去て精神の快樂を重んずるの痕跡は聊り見る可きに似よりと雖ども同時にあの開明のた先に世に獨身者の數を増し其始末は誠よ當惑の次第にして唯一線の血路は窮策ふも醜策ふも娼妓に依頼して社會の安寧を保

つの外ほるべららざるあり仮に今人間世界に娼妓を全廢して痕跡をもあきよ至らしめん歟、その影響の實ふ恐るべきものならん例へば近く東京に於て新吉原を始先として幾箇所は遊廓と禁お兼て市中賣姦の取締を嚴にして之と封鎖したらば如何なる事相を呈すべしや數月を出でずして満都の獸慾自から禁ずること能はず、發してい良家の子女の姫奔と爲り、伏しては孤枕の寡婦の和姦と爲り、密通強姦と爲り、勾引欠落と爲り或は大に破裂して諸處の争鬭と爲り社會の秩序もこれをために紊亂せられて復た收む可らざるに至る也疑と容る可らずと雖ども古今幸に玄て斯る慘狀を見ざるゝ之と娼妓は効力と云ひざるを得ざるなり抑も娼妓の業は最も賤しく最も見苦しくして本人の心身共に最も苦しきものありと雖ども今の人間社會の組織に於ては萬々これと廢す可らざるのみか僅ふこれよ依頼して秩序を維持し來り、

此者あふざれば秩序忽ち紊亂をるとあるからふは本人のこの業を執る其目的は兎も角も社會より之と論玄其人と業との如何と問へぞして其業の成跡を見れど娼妓も亦是れ身と苦しめて世に益する者と評せざるを得ず比喩は少しく奇なりと雖とも或る西洋社會學士が娼妓を評して濁世のマルタルと名けたるあとあり蓋しマルタルとは法教の主義のたゞ生命を犠牲にする者の名に玄て即ち身を棄て、衆生濟度ふ供するの仁者なり日本ふて云へば親鸞上人曰蓮上人の流が草を席ふし石と枕にして法と説き甚しきは流罪は苦痛を嘗め斬首の座ふ就くまでにしたるも皆法のため、衆生安樂のたゞに身を犠牲ふ供玄たるものより外ならずマルタルの功德大なりと雖ども今娼妓がこの濁れる世に中に居て其容易に起るべき惨状を未だ起らざるに救ふの有様と評論すれば其人物、其事業、其目的こそ異なれども社會の事跡に現

はれたる功德の大小輕重は之を親鸞曰蓮の功德に比して差違あき者と云ふべし如何とあれば身を苦しめて世に安樂幸福を助ける者これをマルタルと名くればなり我輩は娼妓と廢せんとする者にあらぞ却て之を保存せんとこそ願へども其これと保存するに方法に就て説あり之を次々陳べん

娼妓の今の世に要用に玄て缺く可らざる次第ハ前々之と痛論して讀者も多分異議なきあとならんと雖ども然りと雖とも其業たる最も賤しむ可く、最も惡む可く玄て然かも人倫に大義に背きたる人非人の振舞ありと云ふの外なし之と業とする者は既よ女子たるの榮譽を失ひ之と弄ぶ者は既に男子たるの面目を棄て共に與に人非人境界を陥りて畜生道よ戯るゝ者なれば苟も文明の人間世界に於ては千百の事情のたゞに之を禁ずること能はざるも深く之と隠すの注意なる可ら

す前節の比喩ふ人の衣服は醜体を掩ふものありと云へり衣服之人身の醜体と除く者あらざれども之を掩ふときは外見醜みに等し故ゝ娼妓賣淫の醜体も之を隠せばとて其實を除いたるふは非ざれども、隠すと隠さるとは人の身体に衣服を着ると着ざるとれ相違にて最も大切な事と知るべし西洋諸國に於ても娼妓は最も多くして之と弄ふ者と最も盛なれども同時ま文明の裝飾最も嚴重にて人の目ふ觸るゝことあし饭令へ之ふ觸るゝも之と口にし又耳もそる者なくして其社會の外見の美あること貴女子が衣裳を着飾りて優然たる者の如し或は其内實を探り衣裳を褪て内部を見さらを意外の瘡痕も現はきて見るに堪へざるの醜体あるべしと雖ども文明れ眼之唯衣裳の美惡と評するのみしき衣裳内の物と問はず是を即ち文明社會之美なる所に玄て娼妓多くして娼妓なく遊所繁昌して遊所を見ざる由縁

なり然るに今眼と轉して日本社會を見れば事体全く反対に玄て娼妓遊廓は世現はきて人の耳目著しき者なきが如玄例へば東京ふても各所の遊廓争ふて其外見を張り、之を示し之を吹聴しく尙ほ足らぎきば門前ふ特に花樹と植へて燈と點し又時と玄て「にばか」と稱し衆妓女の行列舞樂を設けて廓内の街道と押し廻はり唄の文句に花江戸町京町と云へば歌人ハ三十一文字を讀んで情け濃あるを愛で詩客は四七の竹枝を作て風流を詠する等それ騒々しきこと實と言語も絶へたる始末にして之と隠すは扱置き唯人に知られざると是れ恐るゝ者の如し遊廓の仕組既に公然として騒々しきれを遊人のふゝに遊ぶ者も亦公然として憚る所な玄徳川政府の初年にハ大名主族が夥多の從者と從へて馬と騎し乘輿と乗りて遊廓に往來したりとの話は人の記憶する所ならん今日は流石と文明簡易の日なれど娼妓と買ふえ

同勢と召供する者はなりるべ玄と雖とも歴々たる紳士、飄々たる書生、車と飛バして奔走出没、北州の濃情、南海の快遊、これを語り、これと説き他の失敗と嘲けり、己グ得意と誇り、脊中を敲かれく肩を脅玄、目と細くして涎々流玄、喋々喃々その騒々玄きこと傍より遽に之と聞けば血氣の壯士が前日遊獵ハ樂事を再演して語るものと疑ひるゝばかりなり斯の如く遊廓の遊は日本ハ天地に公明正大のものなるが故ニ往々あれと人事の交際に利用し商用の懇談、爭論不和の調和、又ハ舊相識再會の饗應、文人墨客の集會又時としては政治上の談論、自分出處の内話等あれと彼の仙境に催しらば一入の興を添へて談亦熟モるふとなふんとそ眞面の人品ハ衣服と正うし半白の故老は杖と携へ正々堂々悠々闊々としてゐゝに會合する者あり又地方の人物が都下の見物に月餘滯在の其中に銀座通りの煉瓦屋、芝上野淺草向島等ハ既ム之と見

物して諸官省裁判所等も其外面より之と一覽したり此上は諸工場諸學校なれども仮令ヘ工場學校は後にするも吉原れ遊興は生涯の話ハ種々一度び試ミざる可らず多年の宿願に出京してゐの一興を缺いで之故郷に土産と忘るゝふ等として其あれと重んずるは上野淺草向島の景勝に并び立て遙に工場學校の上ふ在るが如し遊廓の名聲高くして其公然たるよと推して知るべし

習慣既に成れば其力ハ向ふ所ム敵なし正と壓玄て邪と爲し理を掩ムて非と爲すべし况んや正邪理非の不分明ある醜と變して美と爲モス於てをや我日本國人が娼妓の業と醜とせず遊廓の遊興と公けにして愧ぢざるは戰國より封建の時代ム由來しる習慣ム壓玄られて然るものなりと雖ども一旦心機を轉じて世界の文明と通覽玄我日本國ハ此文明に對して如何ある關係に在るものかと思案したゞば今日の日

本は戦國封建の日本に非ず志て文明は日本たると發明すべし若しも我文明又足らざるものあらば國民の分として之と補ふは義務あるとも亦自から明白なるべし然らば則ち娼妓の一事も他の文明諸國に於て人事の秘密又屬するもとあるを我國又於ても其風に倣ふて之と秘密にせざるべからむ試み思へ彼は遊廓に花々しく樓を築き、花樹を植へ、燈と點し、妓女<sup>にはう</sup>の行列を催して樓上樓下戸内戸外絲竹管絃に賑ひに遠近の耳目と引くは醜体を隠すには非ずして畜生道の極樂之處に在り四方の貴客即ち無數の獸類<sup>ハコ</sup>に來りて獸戯を戯れ獸慾を逞うせよと聲高<sup>トカ</sup>に吹聴して繫内するに異ならず西洋東洋禽獸甚ざ多し我輩その内實に於ては特々日本人の品行を愧るには非ざれども唯その聲の高くして形の明あるに赤面するけみ世の識者果して我輩と感を共<sup>ム</sup>し說と同うする歟、甚た妙なり若じも然らずして

異感異說、甚ざしきは夫子自ら犯す所のものありて之と遂げんとあらば亦是れ一說あり遠慮なく其說を立て來れ我輩も亦遠慮なく之に答へて是非と明<sup>ム</sup>せんの<sup>ミ</sup>本來是等の事が盜倫の如き公然たる惡事あれば政府の法を以て公然これと禁じて其底る處までも極むべしと雖ども濁世の人情を顧みく社會の秩序を考ふるときハ決して之と禁すべからず、之と禁すべからずして之と隠さんとす最も困難なる場合にして逆も政法の達すべき限り<sup>ハ</sup>非ざれば之<sup>ニ</sup>任する者は社會先進の士の私に在ること、心得人々に負擔して力を盡すこと肝要あるべし即ち我輩が特々世の識者に注意を促モ由縁あり

今の日本男子が內行と慎まずして婚姻の法を等閑に附し内妾外妾これと求るは媒介に錢を用ひ甚ざしきは其正室本妻と稱する者の出處さへ曖昧にして人に公言すべからざる者少ふらず又藝妓娼妓の醜

と醜とせずして公然あれに戯れ曾て愧るもとあき其有様の前既にあれと記し斯る社會の醜體の由て來る原因は遠く戰國の世に在りて近く封建の時代に風を成したるものなりとて次第も讀者に於て既に注意せられたるもとならん左を近時我文明は次第に進歩するよ從て戰國封建の遺風も次第に止ミ此文明世界に出身する後進は輩は品行の一事に就ても大に面目と改むべき筈なるに其事跡甚ざ少なくして隨て出れど隨て奇なる者あるが如きは不審ふ堪へざるもとなれども是を亦今の勢ふ於て當さに然る可き理由あるもれゝ如し抑も社會多數は平均よ於て後進の言行ハ先進の型ふ鑄治せらるゝものにして拔群の天資を具ふる人物ふ非ざれば能く此型を脱して獨立せるものなきヒ常とす故に品行ハ一事に於ても後進の取て以て手本とする所は先づ近く先進の例に倣ひ其醜美とも又先例に依るは免うる可らざる

の勢なるに不幸あるは今の社會の先進故老は二十年のむかし國の政治の變動と共に身の品行とも變動迄て隨分その極點又達し爾來身に染みたる習慣を拂ふもと能はずして今日よても内室の出處と公言するよ苦しみ妾宅の番地を問されて困る者も少なからざれば後進の見る所にて品行は人生の些末事、身を輕重するに足らざるものありと心得て往々人の目に餘るほどの振舞すれども曾て先進故老の前に首尾と失ふことなきのみ却て交際と親密にするの意味なき又ほらす故老大人の言を聞くに一切の人事に就ては常に正義道德を語り德教彝倫の事共甚だ嚴重として天下後進生の薄徳と憂ふるなど至極條理の貫きたるが如くあれども談緒と轉えて近く人々一身上の品行論に至れば其洒落無頓着あるふと流水の流暢して曾て停滯せざるものゝ如く前言は正格、後言の變通、前後恰も二人は口より出でたる言の如くに

響くが故に血氣未だ定まらざるの後進生は大早計にも不品行は徳教  
彝倫外の事ありと信玄て憚る所なきに至るも是非なき次第にあらわ  
れ蓋し若だ時より酒癖あり玄老爺は悴より酒を諒しめ面に痘痕ある者は  
子供の種痘と怠ることなし我が身の缺典を後悔し我が身は不幸より懲  
りて後と警しむるの情ならんと雖も是れは親子の間にしそ然るの  
にして先進故老の後進に對するは斯の如く深切あらず己れ曾々大  
酒にして今も禁酒をると能はざれば世間ふ酒客の多きを悪まず己  
れの面に痘痕あれば世間ふ痘痕の仲間なるを厭は老畜に之と悪まず  
厭はざるけみあらず其私心の底を叩けば惡しき事とは知りあがら竊  
に同類の多きを悦んで同情相憐み同氣相求るの意味などにあらず後  
進は品行と縛れるふ繩なきものにして其奔逸をも亦謂れなきに非  
ざるなり

又世の中に一種の才子なる者あり此者は大抵皆讀書の法も知り文筆  
もあり又事と爲すの才もありて近年世間が西洋流の文明開化と云へ  
ば其中ふは横文さへ読み覺へて時としては外國にも往來し其人物に  
交はり世務政談様々理窟と云ふことも巧にして又これを文章にも綴  
り事業にも行ひ一見したる處にては文明有爲の學者として通用をべ  
き輩あるも其本を尋て本心の在る所と求めば漢學者け境界を脱す  
るふと能はず其文明論中又事業中往々儒流は馬脚と現はして人々笑  
くるのみあらず其儒流も程朱の竊窟主義にして律儀一偏なれば尙  
ほ恕すべしと雖も漢儒の何流より身持の不行跡ある  
ふと實に言語道斷にして沈淵冒色花柳よ戯れ青樓に醉ふが如きは尋  
常一樣の人事としそ愧るを知らず人倫の最も大切な婚姻法さへ腰  
味にして一時は外妾定時の内妾凡そ今の濁世に犯すべき不品行の箇

條は一として犯し得ざるものあくして然かも其事を秘密に玄て隠す  
は謀を爲さるのとか彼等の仲間にそは放蕩嬉逸を以て自負の談柄  
と爲玄衆人廣座の中をも憚らずして猥語醜言、自から稱して通客色男  
なと公言する其様は野蠻人種が赤裸にて白晝横行するは狀々異あら  
ず日本の下人は動もそれば四肢肉体を露は玄て不体裁あと云ふ者あ  
れども何ぞ料らん遙ふ上流の才子連中より美衣盛服衣冠正玄くして  
赤裸なる者多し而して此輩の談論或は眞面目の事に入りんとするこ  
とゆゑを乃ち横道に遁れて自かう防ぎ、妓と擁して天下の事と語り太  
白と啣んで宇内の形勢を談むるあと態と漫語放言して以て己れが不行  
状を瞞着し世間の人も亦よく之ふ欺かれて其罪を問はず却て之と  
目玄て紳士學者あり、事務政治家なりとて社會地位と許すダ故ふ後  
進の輩がまの漫語放言に敷唆せられく方向を誤る者多きも亦謂れあ

きに非毛一身と自棄するのとなら併せて人の子と賊ふ者に玄て社會品行の蠹賊とは實ふふの才子のことならん晋の謝安が常々妓女を従へて東山に遊び天下の士大夫これふ望と屬したりと云ふあとあり蓋し今は才子の流は謝安と以て自から氣取る者か晋代の野蠻世界はいざ知らず十九世紀の文明は公けふ醜體と許さず、高らかに醜聲を放たしめず、プロスナチャートと擁して自うら嬉しむが如だ遊治郎と求めて誰をか之に天下の蒼生を托する者あらんや獨り日本國人なる我輩の不服なるれみあらず世界の輿論は許さる所あり又この才子等が人に其不行狀と咎められたるとき最後の遁辭は亦是れ世間の附合なりと云はざる者あし人へ交際のた先に我が婚姻法と紊ると云ふも些と不都合なれども姑く之と許し彼の附合とは宴席に藝妓を召し又は青樓に登る等の事あらんと雖とも抑も附合とは主客互に仕向けて

互に報るの義なれど不行狀不品行が附合とあれば双方共に故さらふ犯したる罪よして遁辭の通用すべき限り非ず畢竟するに此輩は精神の尙ほ未だ發達せざる人種ふして人生肉体の外に快樂あるを知らず僅に酒色の興に藉りて始て能く笑語と逞うして仮りよ活潑の風を裝ふもれよ過ぎす此點より見れば惡む可らず寧ろ憐む可しと云々可あらん故に今後の後進生の品行を正しきに導いて方向よ迷ふことありらしめんとするは先づ此一件に就て故老人の磊落主義を廢し又彼の才子等の頂門に一釘を加へ仮令へ反正の實を行ひ得ざるも毎事に扣目にして秘密の一義を守らしむるの工風あかる可らざるなり我輩竊に案するよ日本士人の德義は之と他の文明國人の有様に比較して決して下等なるものよあらず廉耻の心慈悲の情忠孝信義禮讓の徳と或は他國人に優るあるも決して劣るものにあらざるは我きも信

玄人も許す所なるに獨り品行は一件よ至りて言ふに忍びざるもの多玄畢竟戰國より封建の時代に由來して加ふるに儒流の數の等閑ながためよ社會一般の風潮と成りて然るもけなりとい我輩の所見にして前段ふも略その意を述べたりしが爰に又この風潮よりして士人の心を誘ひ不品行を犯しながら其慚愧の念と薄から志むるの近因を生じたり是れは他の文明國にくして日本に固有する事情あるが故にためよ一言せざるを得ず抑も男女相對平等の權利を掲げて人の妾とあり錢を以て情を賣るの藝娼妓たるが如きは人類の最下等にして人間社會以外の業なれども古來日本國の風潮に於ては左まで之と賤しきものとせず女ハ氏なく玄て玉の輿あと云ふは妾が立身して遂には本妻の格に昇り又その産えたる子が偶然に相續の主入となれば母と仰がれて身分甚ざ貴きが故に女子の妾奉公は男子の仕官に異あら

走志て或ひ之と女子の青雲に志す者と云ふも可あり又彼の身を賣りて娼妓となる者は身と憂き川竹の苦界に沈むるあと云ふて隨分不愉快なるものとすれども其これを沈むるや家の不幸父母の病氣に藥を買ふダため良人の災難と救ふがた先ふする等様々の事情又追まりて遂に肉体を賣ることもあるが故に本人ふ於ても深く愧るの心なく傍の人も之を見て左まで賤乞まざるのとか却て之と憐みて竊に之を譽るの情あるゝあらぞ又古來の正史小説芝居等にて是等の事を記し又作りて世間に公けにそるふ人の妾あり又娼妓なり人倫の大義より論じて賤しめたるものとては絶てゐるふとなく例へば常盤御前靜御前の義朝義經又於ける虎御前少將の曾我兄弟に於ける阿古屋の景清に於ける小紫の權八に於ける宮城野信夫の敵討、おうるの身賣等計ふるゝ暇あらず何れも皆賢女烈婦として甚だしきい學者の著はしたる烈

婦傳の中に載せたる者さへある程に志て世間の婦女子が斯る小説と讀み芝居あそ見物それば自然に女中の談柄となり自然に其思想を動かして之を賤しむるよりも寧ろ之を慕ふの念を生じ機ふ臨んで實際ふ當るときは自から求めて人の妾たらんことと願ふ者あり又藝娼妓に身を沈めても自うら耻辱と感するあとあき者多矣是れ即ち我國の賣姫者中に往々良家の子女を見る由縁ふ志て西洋諸國にハ絶て無き例ありと知るべし故に士人等も初の程は唯獸慾のためにこは賣姫者ふ戯れたるものが次第に交を重ねて次第ふ其内外は様子を見れば人非人中自から人情あるのみあらず稀にハ眞ふ泥中は蓮花ある者を發見そることあきにあらず仮令へ千萬中の一にても自うら賣姫社會に光を生ずるは姿にして遊冶郎の放蕩不行跡に口實を假もれと云ふべし

又一方には我國男尊女卑の習慣、人心の底に銘して之を洗ふべからず其女卑の極度に至りては男子の不行跡を傍観して之を許すのみあらず或は傍より之と助けて故さらに自由と與ふるの事跡なきに非ず例へば細君閨裡秋未だ到らざるも主公顔中春に足らざる色あれば細君の方より妾を養はんふとと勧め、表面に之と勧め表面よ之を辭し、再三押し問答の末、勸告は變々く歎願とあり止むを得まして之を許し妻妾睦玄く暮せば世間の評判甚ざ宜しくして之と婦徳と稱するが如きは古今富貴の家よ珍よしからず唯富貴の大家のみあらむ都て尋常一樣の家族に於て主人ダ放蕩にしく藝娼妓等の戯れに狂ひ殆んど乱暴無狀なるも内と守る細君ハ曾て之に喙を容るゝと得ず若しも之を争ふて風波と生ずることあれば天下の輿論ハ男子の方に左袒して婦人と助る者なし男子にして少しく婦人に自由と許し少しく之に敬意と表

して之と親愛すれば世論あれと結構人と稱し間抜と罵り人に齒ひそるを許さるやどに擴けらるゝ其反対ふ婦人が男子の不行跡を咎めざれば賢婦人の名と得べし、同玄人類にして同じ權利ある男子と女子とふして女子は間抜の極端と守り啻々男子を親愛するのみならず其放蕩無賴をも許して始めて賢名を得るとは不可思議の事あれども輿論の然らしむる所これを如何ともすべからず數百年の習慣、當局の婦人に於ても不平と訴るに道を知らむ唯女人の身は斯の如く憂きものありと觀念して尙その上よも無理に外面を裝ひ苦しき中より強ひて自ら慰め男子の色を漁あさるは其身の働くあり吾々婦人が其間に喙と入るゝは野暮なりなぞ前後始末もなき言を吐き他の自由自在又任せるが故に男子の身と爲りて之内ふ顧るの心配あく外に在て之時として泥中の蓮花に逢ふの僥倖なきふもあらずして世間一般の風潮

ハ醜体明にして其体を見る者あく醜聲高くして其聲を聞く者あきの安氣あれば今の男子の品行正しうるんと欲するも苟も獨立獨行ハ氣象あるに非ざをば決して得べからざるあり

我輩既に章を重ねて日本男子品行の事に付た所見を陳べ今の洒落無頓着なる様と、その今の有様ふ至りし原因とと論説したり然りと雖ども其有様を知り其原因と説くも之を救ひ匡すの方法を得ざれば唯一編の紀事たるふ過ぎず依て今あゝふは其方法の一斑を記して以て全編の局と結ばんとす但しこの事たるや獨り政府の力と用ゆ可きに非ずして専ら社會先進の人の心掛けに存するものなれば我輩の依頼モる所は唯おの人々あるのみにして幸に今我國には純然たる文明主義の士人に乏しからず古學の陋習と脱して又輕薄才子の風に倣はず身自うら其身と重んじて其尊きと知り個々の身の尊重を積んで一國の

尊重を成し以て立國れ脊梁骨せほねともある可き人物と我輩は竊に知る所又於ても甚だ多たよとなきば微意の目的と達する亦難きふ非ざるを信するなり扱はれ着手に臨んで如何すべしと云ふふ本來我輩が思ふまゝの所望を云へば満天下の男子として其品行を重んずるふと生命と重んずるが如くにして完全無缺清淨潔白あらし先んとするに在りと雖ども今け濁世に於ては迫も望むべからざる事たるも我輩能く之と了解し是に於てか一步も二歩も譲りて仮令へ内實は不品行を犯もしも之を秘密ふして世間の耳目に隠すべえ、其隠すけ法も様々なるべけれども先づ以て歐米文明國人が巧に隠すやどに之を隠すべえ、或ひ之と隠して外面と虚飾をもる中にハ虛より實を生じて實又清淨なる者を生することもあふんとて窮策中僅に一縷の望を遺したる位のことあれば人心の非と正すあを云ふ大望ハ姑く差置き今の急務は先づ近く

不品行を犯せ者へ聊か苦痛を與へて其舉動と不自由ならしむるれ工  
風肝要なるべし即ち

第一凡そ人の妾たる者は尋常一樣の婦人と并立と許さず或は妾より立身して本妻の位より昇り又は初より妻と稱する者よりも其婚姻ふ錢の媒介と用ひ、内實賣買の姿と以て得たる婦人は一切妾と視做して他の正當の婦人と同一様の榮譽を得せしむ可らず、人或は説を作り妻は夫と榮譽を共にする者なり仮令へ其出身の初が妾にても後に妻たれば則ち妻にして他に異なる所あるべうらずと云ふ者もあらん歟、我輩一例を作りて之に質問すべ左爰に男子にして曾て錢のたれに男妾たりし者が（男妾なる者が實に世の中より有るや無きや我輩知らずと雖ども仮に設けて云ふけ）後に自ら富貴となるか又は富貴の家に養子とありたるふとあらんと社會の人は此男と許すと他は正當の男子と

同一様の榮譽面目と以てする歟、我輩はその必至然らざるを信ず然より則ち男妾と女妾と何れ異同あるや等しく人倫の權理を屈て情を賣りたる者として男子なれば擯斥せられく女子なれば然らずとの道理はあらるべし

第二藝妓にても娼妓よりも苟も私と公けに賣姫と以て業とする者は之を人間社會の外に擯斥して人と齒するを許すべからず公然遊廓と名くる區域を設るも不体裁あるに似されども古來の慣行、一朝に廢することも難うらんあきば之と默許に附して禁ずるにも及はずと雖ども社會より之を視ること恰も封建時代の穢多村の如くして男子のこゝに遊戯せる者は當時の遊冶郎が稀と穢多の小屋に出入して彼の所謂女大夫の嬌を買ふと同様ふ極秘極密に覺悟あからしめざる可らず（女大夫といひむかし穢多の女子にして三味線唄をもく市に錢を乞ひ時

としては娼と賣る者ありしと云ふ又士君子の宴會等に賣娼藝妓の陪席を許すべからざるは言ふまでもあきふとふゑく若し或ひ其宴に歌曲管絃の興を添へんとなれば字義の如く其藝に巧ある妓女と召して別室う又は宴の座末よ之と奏せしむるも可ならん何等け口實と設るも社會先達の君子士大夫と稱せらるゝ者が公然たる宴會よ賣娼婦と笑語戯謔するの自由はなき筈なり然りと雖モ人おのゝ私に自由あり之を摘發して其底る所と窮むるは社會の許さる所あれば若しも二三の親友相會して相互に隠すことなく忌むことあき無禮講を催ふすも亦是を人生の一快樂事よしく殊に肉体以下の樂事よ慣れたる者は自う禁ず可きに非ざれば藝妓も甚ざ要用にして青樓戯も亦可ならん唯秘密の一義と慎んで守るべきのみ我輩ハ多と求めざる者あり

斯の如くして事の成跡は如何なる可きやと豫じ先之と想像するに娼妓藝妓は勿論人の妾まる者も大に面目と失ふて云はゞ人間世界に居あがら一個れ人として人に視られざるが故よ自から彼等の仲間の榮譽品格を落しこれダために従前は自から求めて其仲間に入りし者も今は之を避けんあとを勉るゝ人の心の必然の勢にて又これを避る者は必ず先づ良家の女子稍や教育ある者に限る可ければ賣娼社會寧として復た泥中の花を見ず跡に殘る者は無智無德破廉耻の下等婦人のそにしそ甚た玄きは夜叉鬼女とも名づく可犯者なれば浮世の男子も之に近づくには少しく氣騒ぐる犯情と催ふ志て殊に上流の士君子は藝娼娼妓又は外妾あど云ふ名義に愧ぢて自か忍ふこともあるべし或は仮令へ内實に忍ふ可らざるの事情に迫りて不品行と犯すも力は及ぶ丈けい之を秘密にして外見を裝ひ社會の見る目に美と添るの

成跡あるべし即ち我輩の工風よて男子の心に苦痛を與へて其舉動と不自由あらしめんとはこの事あり、之と聞く西洋諸國の賣姫婦は實に自暴自棄の境界よ沈没したる者にして、或も尋常の社會に交際と求めるの意もあく父母兄弟と知らず、鄉黨朋友に背き、世界到る處に放食鯨飲して日一日を送り、今日に玄て明日と謀らざる其亂暴の實に女中さうに破戸つとも云ふ可か様なきば世間の男子も容易よ之に近づくふと爲せぞ飯令へ近づくも大に注意と要ることにして、無智無力の男子ふては不品行を犯すふとも叶はざるほどの有様ありと云ふ實は賣姫社會とても智徳ちとく乏ひしくして言行の賤しきひどい好ましからぬおとなきども既既人倫じんりんをも破りたる者へ德義の厚からんことと求るも見込少すくなき所望なれバ其賤しきは賤しきまゝ打棄て置き、其賤しき臭氣を放ちて以て士人の近づくんとする者と拂ふは自から亦經世の一策あるべし

故に我輩の日本の賣姫婦の地位として西洋の同業者と一様あらし免めんことと冀望する者なり或人の説ふ娼妓の梅毒ばいとうを検査するは公共こうこう利益に似たれども一方より論すれば徒に天下の遊冶郎を玄て安心して不品行を爲さしむるの媒介たるが故に寧ろ検査の法ほうを廢し娼妓しょうぎに梅毒ばいとうと以て他の不品行と防ぐの一具に供せるに若かずと云ふ者あり言慘酷じんく似たれども甚ざ道理あるが如し蓋し我輩が大に賣姫者の地位を賤しくこそ上流士君子の之に近づく者と防禦ぼうえいし又またの事を秘密にせしめんとするは事柄じへいふそ違へども梅毒検査を廢するの説と精神を共にする有あり

明治十八年十二月七日出版御届  
同 年十二月 出 版

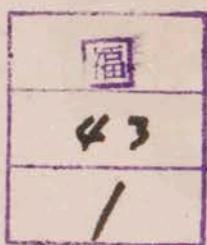
定價金十七錢

大分縣士族

拔萃兼出版人

石川半次郎

東京日本橋區通三丁  
目十一番地寄留



人と生きては新聞紙を讀まさるべからず新聞紙と讀まさ  
れば世上の事に眞闇あり世上の事に眞闇みては目盲も同  
様あるべし

# 時

# 事

# 新

# 報

便錢一枚  
稅一六金  
箇箇月錢特  
時月錢前○事  
事金廿金一新  
新六三箇  
一日報錢圓月報  
錢錢錢錢  
六六七八六二日告價  
錢日以料金〇十  
錢厘錢錢  
五五六七十七日以前  
錢錢錢  
四八三二十五日迄  
厘厘厘  
五五六六十六日以前  
錢錢錢  
一五九八厘迄  
厘厘厘  
四五五六六錢  
八二六四厘厘厘  
郵十

福

43-1

著作